



小林秀雄全集
第六卷

ドストエフスキイの作品

新潮社版

小林秀雄全集第六卷

ドストエフスキイの作品



昭和四十二年十二月二十日 發行
昭和四十九年 八月十五日 五刷

定價 二千五百圓

著者 小林秀雄

發行者 佐藤亮一

印刷者 塚田重

印刷所 塚田印刷株式會社

寫眞版印刷 半七寫眞工業株式會社

製本所 新宿・加藤製本所

發行所 株式會社 新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話 東京(28)五二二(業務部)

東京(28)五四一(編集部)
振替東京八〇八番 郵便番号一六二

(亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。)

ドストエフスキイの作品

小林秀雄全集第六卷

ドストエフスキイの作品

「永遠の良人」	九
「未成年」の獨創性について	一五
「罪と罰」について I	二六
斷想	三六
「白痴」について I	七〇
「地下室の手記」と「永遠の良人」	二六
「惡靈」について	三五
「カラマゾフの兄弟」	一六
「罪と罰」について II	二〇六
「白痴」について II	二四

後記

解説	江藤 淳	三三
----	------	----

ドストエフスキイの作品

「永遠の良人」……………	九
「未成年」の獨創性について……………	一五
「罪と罰」について I……………	二六
斷想……………	四
「白痴」について I……………	七〇
「地下室の手記」と「永遠の良人」……………	一六
「悪靈」について……………	一五
「カラマゾフの兄弟」……………	一六
「罪と罰」について II……………	二六
「白痴」について II……………	三六

後記

解説……………	江藤 淳……………	三三
---------	-----------	----

編輯

大江
中村
藤光
淳夫

大岡
昇平

解題……………吉田熙生……………三

ド
ス
ト
エ
フ
ス
キ
イ
の
作
品

「永遠の良人」

ドストエフスキイ「永遠の良人」の岩波版（原久一郎氏譯）が出たのを機會に再讀する。言ふ迄もなく、甚だ陰慘な讀書だが、かういふ小説にくらべれば、現代の日本の小説、まづ大概のものは多少屁みた様なものだと思ひ到り、下劑がうまく利いた時の様にさばさばした氣持ちになる。

ドストエフスキイの名を聞くと、すぐ文學青年趣味を聯想する、わが國の文士氣質の一隅に、いまだに棲息してゐる低劣頑迷な偏見だ。この偏見の構造は、かなり込み入つてゐる。

世間よりも文學の好きな、平凡よりも深刻の好きな未熟な心が、この大作家の作品の、強い劇的な外見にひかれるといふ事は、そもそも消極的な事情である。これにからむもう一つの遙かに度し難い事情、つまり逆に、深刻といふ言葉を使ふのがテレ臭くなつた老成した心が（衰耗した心ではないと誰が言はう）、この大小説家の怪奇性の實質をさぐらうともしない、「罪と罰」は、いゝ小説だが通俗的だと眞面目くさつて信じてゐる、その處だ。

「純文學などといふものは青年の夢だ」、かういふ音が、どこを押しても決して出ない様な男が、所謂老成作家のうちに幾人あるだらうか。

多くの作家が、世間の文學的理解からはじめて、文學の世間的理解で身を終るものだ。

若しトルストイが「永遠の良人」を書いたら、この作品は、恐らく二倍の分量になつてゐた、少くともこの小説の前篇を書いて置いて置いた、と私は思ふ。

ドストエフスキイは、前篇的顛末を、ものの見事に割愛してゐる。作は、ウエリチャーニノフとトルソツキイといふ二人の男の相剋に終始するが、讀者が、ある夏の日の兩人の唐突な邂逅をみせられる時に、兩人とも既に、讀者の知らぬ、背負ひ切れぬ程の過去の重荷を背負はされてゐる。

ウエリチャーニノフ——「今四十にならうとして、小皺のよつた彼の兩眼には、殆ど何んの明るさも人の良さも消えてゐた。反對に、あんまり身持ちのよくない、疲れた男の皮肉が、狡猾が映つてゐた。一番しげしげ映つたものは嘲笑であつたが、まだ以前にはつひぞなかつた様な陰影であつた。悲哀と苦痛との陰影、言はばあてもない、だが深い、放心した様な悲哀の陰影であつた。ことに一人でゐる時には、これがひどかつた。(中略)

處で、この毎日のひどい記憶力の紛失にも拘らず、彼の遠い過去にからまるすべての事、十年十五年以來忘れ果ててゐた色々な事件が、時として、突然甦る。あらゆる枝葉にわたり、まざまざとした印象をもつて甦る、まるで彼は二度生きる想ひであつた。ある事件は完全に忘却してゐたもので、思ひ出すといふ事が既に奇蹟の様だつた。それだけではなかつた。廣くこの世を生きた人々が、それぞれ獨特の思ひ出を持つてをらぬ筈はあるまい。だがこゝで重要な事は、この過去が、今甦るに際して以前思つてもみななかつた様な、全く新しい、意外な角度から姿を現した事だ。どうしてこれらの思ひ出が今日眞の罪惡の姿となつて彼の眼に見えるのか。而も必ずしも彼の理性が、さう判断を下すのではない。いや恐らく彼とても、自分の陰氣な孤獨な病的な精神を信用してはゐないのだ。だが結局彼

はわれとわが身を呪ひ、殆ど泣き出しさうになつた。表に見える涙ではないといへ、それは内心の嗚咽であつた」

トゥルソツキイ——「アレクセイ・イワーノウィッチさん（ウエリチャーニノフの事）、殺された男、言はば完全のびちまつた男、先づそいつを御想像願ひたい。この男は二十年の結婚生活の擧句、生活ががらりと變へて、埃っぽい街を、まるでステップでも横切る様に、これといふ目的もなく、殆ど痴呆状態で、うろついてゐるんです。而も、この痴呆状態のうちには何かしら酔ひ心地を見附けてゐるんです。かういふ時若し私が偶然見知り越しの人間に會つたり、いや親友に會つたりして、早速寄りつくまいと逃げ出すとしても、これは當然だ。だが又かういふ時もある。思ひ出といふものが堪らなく生き生きとして來ますとね、つい背後にはあるのだがどうしても取返しのつかない自分の過去に關係のあつた人間、誰でもかまはないこの過去の目撃者、さういふ友の腕に今にも飛びつきたい様な想ひに驅られるものです。もうかうなると、晝も夜もない、かうして朝の三時に人を起す始末にもなる（中略）、人間は自分の苦痛を飲んで酔つばらふものです。さうなるともう、この私を惱ましてゐるものは苦痛といふものではない、何かしら別な新しいものなんです」（N・R・F版による）

自分の生きて來た過去といふものが、未來への希望や危懼と結託して、心の奥底で、どの位無氣味な陰謀を刻々と進めてゐるか。作者は因果な二人の人物を、現實的な交渉に投げ入れるに際して、この錯雜した心的事情を、簡明的確に語つてゐる。如上の引用文は、この驚く可き確さの、ほんの片鱗を示す見本である。

それにしても、この引用文の描く處、一體どこが病的なのだらうか、どこが異常か、どこが奇怪か。そんなものは何處にもない。見るものはたゞ平常な人間心理だ。一は二十年の漁色生活による、他は

二十年の結婚生活による、數々の苦痛が念入りに育て上げた、爛熟した人間の心の平常な姿だ。一步進めて言つてもいい。人間四十年もこの世に暮して、この程度の心の無氣味さが持てなければ、彼は馬鹿だ。訝る方こそ未熟なのだ、未熟でなければ感傷的なのである。

「世間は小説の様には參らぬ」といふ。「事實は小説よりも奇だ」といふ。いづれ兩方とも本當なんだらう。だが、世の凡庸小説家が、例外なく、「世間は小説の様には參らぬ」といふ格言を虎の子にして小説を書いてゐるといふ事は、注目する價值がある。なぜ知らず識らずさういふ事になるかといふと、「事實は小説よりも奇だ」といふまさしくその點を狙つて、通俗に陥らず、悠々と表現するのは、凡手の能くする處ではないからだ。

近頃、世間がこの凡庸作家の凡庸小説にあきて、實話といふものが大變流行してゐる。これら無數の實話の語り手、いさゝか作文の心得があるばかりに、氣の毒だが嘘八百にみえる。

大衆小説といふものも亦今日大變流行してゐる。成る程世間は大衆小説みた様には參らぬ。だがまづい事には、世間には大衆小説の筋書通りに動いてゐる人間もある。處で大衆作家がかういふ人間を眼のあたりみて愕然としたなら、大衆小説なるものは出來上りつこない。尤も愕然とはしてゐるが、何しろ金がまうかるので、といふ人はこれは又格別な人である。

妻が死んではじめて親友が妻の情人であつた事を知り、娘が因果な種であつた事を知り、苦痛に酔つた男が、八年ぶりで、朝の三時に、ふらふらと情人の許に舞ひ込む。情人は情人で、藪から棒に老いの訪れた中年の厄年に際し、過去の重みで（彼自身は故知らぬ重みだと信じてゐる）憂鬱症にかゝり、眠られぬまゝに、窓から訪問者の近づくのを眺める。鍵穴から廊下を近づいて來るのを眺める。

誰だか思ひ出せない。矢庭にドアをひらく。

扱てどういふ場面が小説理論的に展開しなければならぬか。實物に就いて見られんことを。

どんなに複雑であらうとも、孤獨な人間の心理を描出するのは容易である。なぜかといふと、人間が自分の錯雜した心理を表現する術を知らない時、而も好都合にも外部からその表現を強ひるものがない時、彼は夢をみてゐると同然だ。彼の行爲といふものが問題ではないのだから、この場合、彼を取扱ふ作者は、又彼同様に、夢見心地で文字を織ればよい。

だがかういふ心理状態にある二人の人間が邂逅した時にはどうなる。突然奇妙な革命が起る。一人である時には、自分の心をどう言ひ現す術も知らなかつた二人は、今その表現を強制される。強制される許りではない、兩人は、これをアツと思ふまに實行して了ふ。

さゝやかな人間の言動が、仔細に點檢すれば、どれ位複雑した導因を、その無意識界に持つてゐるか。この當節流行の問題は、成る程驚くべき問題だ。だが作家にとつては結局消極的な問題だ。遙かに奇怪な事は、さういふ捕捉し難い人間心理が、常に現實の世界で、確定した、のつびきならぬ表情として、言語として、行爲として事實上實現してゐるといふ事なのだ。この事實の大膽な容認こそ百千の心理主義小説的愚論の結論だ。

ウェリチャーニノフとトゥルソツキイとの邂逅場面は、この問題に關して無限の教訓を提供してゐる。描かれた兩人の言動は、恐らく實際にしどろもどろに行はれた様に、まさしくしどろもどろに描かれてゐる。

讀者は、この二人の登場人物に就いてまだ何物も明かされてゐない。二人は互に相手の心を知らな

い、いや各自己れの心も知つてはゐない。すべての祕密を握つてゐるのはたゞ作者一人だ。作者は、殆ど造物者の様な、平靜な、精力的な手で、全く讀者を無視して二人を操つて行く。言ふ迄もなく讀者はこの場面を合理的に理解する事は出来ない、この小説を終りまで讀まなければ理解する事が出来ない。丁度現實に於いて人がある事件を理解出来ないまゝに、事件を見守つてゐる様なものだ。この時人は事件の性格を理解してゐないが、事件そのものの現實性は確實に理解してゐる。この場面が、さういふ在るが儘の現實性を如實に語つてゐる。

この場面は奇怪である。だが奇怪以外にあり様がないのだ。漂ふ空氣は一種象徴的だ。併し、習慣的人間理解の衣を剥いだ時、事物は多少は象徴的に見えるものだ。

先日、私は「ラスコオリニコフの日記」といふ彼の未定稿の冒頭に次の様な言葉を見附けた。「物語は、あらゆる瞬間に、不必要な、意想外な細部によつて、中斷されてゐなければならぬ事」